demihuman

一言　真

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ｄｅｍｉｈｕｍａｎ

【Ｎコード】
Ｎ６４１４Ｅ

【作者名】
一言　真

【あらすじ】
森の外れにある小さな村が、ある夜、未知なるものによって襲撃され、一夜のうちに、多くの村人の命が奪われた。残された者達は、決死の覚悟の上、それを撃退させようと決意する。

第一項

彼が私に「生きろ」と告げたその時、私は一体どんな表情を浮かべていたのだろう。恐らく、目を見開いて驚愕していたに違いない。

生きろ。そのたった一つの言葉が、私を再び人の道へと引き戻した。私の胸には新たに、仲間を守りたいという想いが生まれ、それは心に潤いを与えてくれた。

こうして今、幸せでいるのは、あの時言葉を投げかけてくれた、彼のおかげだった。だが、彼はもうこの世には居ない。私は何一つ恩を返せぬまま、その死を傍観して見送っただけだった。

サファイは、瞼をゆっくりと開く。

朝霧が立ち込める丘に、日に照り輝くたくさんの墓標があった。鮮やかな緑の大地に、点々と規則的に並ぶその情景は、神秘的で、美しく、だがあまりに悲しいものだった。彼は、真正面にある一つに焦点を当てる。

「ベルス……」

そう呟き、サファイは唇を引き結ぶ。彼の右手が、細い手に強く握り締められる。

サファイはゆっくりと、隣に立つ女性を見た。長髪を後ろで結い、左右に分けた前髪からのぞく顔は悲しみにひどく歪み、見つめ返す大きな瞳は、潤んでいた。

「シャーリ」

サファイが呟くと、彼女は僅かに頷いて、墓標に目を据えた。

沈黙したまましばらく見つめると、シャーリの目から溢れた涙が、頬を伝って落ちる。

「シャーリ」

もう一度呼び、彼女の肩にそっと手を置いた。すると、彼女は彼に寄り添うように身体を近づけた。

「血は繋がらなくとも、彼は私の敬愛する生涯でただ一人の父親だった。そして、唯一尊敬する人間だった」
「父さんは、優しくて……厳しい人だったわ」
「ああ。最後まで、厳格だった」
……命の息吹を失うその瞬間まで、彼は厳格な父親で在り続けた。誇らしく思う。だが、それ以上に、悲しく思う。
　嗚咽が、四方から聞こえてきて、サファイは周囲を見渡した。
　若い男性が、墓標前に呆然と立ち尽くし、恋人の名を呟きながら、虚空を見つめている。その目に映った、愛した女性の幻影が、彼を幻想と現実の狭間に閉じ込めていた。
　若い母親とその子供が、斜め前方の墓標前に立っている。子供が無垢な瞳で母親に父親の所在を問いかけると、彼女は嗚咽を漏らして肩を震わせるのみだった。
「サファイ」
　シャーリに呼ばれ、サファイは我に返った。
　彼女の方に振り向くと同時に、いつのまにかその横に立っている男に気づく。彼は村人の中でも年長者に当たり、ベルスと同年代だった。
「皆、もう広場に集まっている。ベルスが逝き、悲しむのはよく解る。俺も、悲しい。だが、今の俺達がどんな状況にあるか、理解しなければならない。俺達に、休む暇はない」
　厳しい口調で告げられ、サファイは切り返す。
「解っている。……私達はまだ生きているんだ。死者に縋りつくことは許されない。行くぞ、シャーリ」
　それでも、シャーリは墓標から視線を外さなかったが、サファイに腕を引かれると、首を後ろに捻りつつ歩き出した。
　そんなシャーリを見て、サファイはもう一度墓標へ振り返り――ベルス。私は、生きる。どんな困難や苦痛に見舞われようとも、それに耐え、生きて見せよう。
　そんな別離と決意の言葉を、心中で投げかけたのだった。

丘を下り林へ入ると、人々の悲嘆の声は次第に聞こえなくなり、やがて自分達の足音だけが響く。
全てが活動を停止したようなこの静謐な空間は、サファイにとって、いつもならば気持ちを静めてくれる場所だった。だが、今日ばかりは、得体の知れない不気味さしか感じ得なかった。
男の後に、サファイ、シャーリと続き、それぞれが四方を警戒して歩いた。
木の葉が一枚空中を舞うだけで、反応して身構える程、三人は警戒していた。
木々の間から、今にも何かが飛び出してきそうな気がする。
「気をつけろ。まだ潜んでいてもおかしくない」
男が振り返って静かにそう言う。二人が真剣な表情で頷くと、男は前に向き直る。
しばらく三人は、沈黙したまま歩き続けた。
時折、鳥のさえずりが遠くから聞こえると、この不気味な林に、昨日までの穏やかさを垣間見て、自然と強張っていた表情が緩んだ。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6414e/

demihuman

2011年10月4日11時56分発行